

地方会・研究会記録

第 12 回職域口腔保健研究会*

< 特別報告 >

個人情報保護と職域健康情報の取り扱い

杉森裕樹 (聖マリアンナ医科大学)

< パネル討議 >

職域口腔保健活動の効果指標の標準化を目指して

1. 事業所歯科相談室活動で用いてきた指標づくりの背景

高橋義一 (東京歯科大学社会歯科学研究室)

職域口腔保健活動の効果指標の標準化は、EBM の蓄積にとって必須の要件である。今回、そのための基礎資料を供するため、職域口腔保健活動に用いてきた指標、選択の背景、示唆された特性について報告した。CPI は客観性、簡便性、普及性から利用したが、歯周ポケット、出血、歯石の有無を個々に記録することにより各種疫学指標として利用が可能となった。その中でも出血指数あるいは 1 人平均出血歯数は、個人情報としても疫学的にも利用性が高いことが示された。DMF 指数においては、世界的共通指標とのことで利用したが、う蝕経験に限られ、3 要素同じウエイト付けであるなどの問題があり、口腔内を総合的に評価できる新たな指標が必要であることが示唆された。また、専門職による客観評価以外に受診者の主観的な評価も行った。口腔にかかわる生活上の問題を指数化したもの、歯科保健に対する知識、態度、行動を指数化したものであり、今後この種の共通指標を併せて検討すべきであるとの結論をえた。

2. 職域での歯科保健活動を QOL 指標で評価することの期待と問題点～実際の活動からみえてくるもの～

井手玲子

(産業医科大学産業生態科学研究所臨床疫学教室)

近年、客観的な指標に加えて、専門家ではなく一般の人々の視点で捉えた主観的な評価指標の重要性が認識されている。それに伴い口腔領域においても QOL を評価することの必要性が高まっている。このような背景から、世界で汎用されている Oral Health Impact Profile (OHIP) の日本語版を作成し、職域での歯科保健事業の評価として活用している。OHIP は、「不快感」「痛み」「機能的な問題」「心理的困りごと」「社会的困りごと」「身体的困りごと」「ハンディキャップ」の 7 領域・49 の質問項目から構成されている。歯科衛生士によるカウンセリング (歯科相談) を中心とした職域での歯科保健

事業を OHIP で評価したところ、「不快感」「心理的な困りごと」の領域で良好な変化が認められた。職域での歯科保健事業の普及をめざすために、このような一般の人々に理解しやすい視点からの評価がさらに必要となるであろう。

第 51 回労働衛生史研究会*

< 一般口演 >

1. 労働衛生史研究会の歩みと今後の課題 第 1 回～第 50 回の演題分析を中心として

堀口俊一 (大阪市立大学, 大阪産業保健推進センター)

2002 年 4 月、第 75 回日本産業衛生学会において、当研究会から特別報告として発表した演題を第 50 回研究会までの分に延ばしてまとめた。当研究会の発足は 1977 年 4 月、第 50 回本学会総会において承認されて以来、昨 2003 年 11 月、高知での研究会をもって 50 回を数える。総演題数は 255 題である。内訳は分類 労働衛生・安全に関するもの 70 題、約 28 % で最も多く、中でも作業・産業別が半数以上あり、残りが国・地域別および年代・時期別となる。分類 人物に関する発表は 54 題、約 21 %、その中で衛生関連事項が最も多く、著作、思想的事項の順になる。分類 職業病は 47 題、約 18 % で、うち、じん肺に関するものが半数近くを占める。以下、分類 産業保健専門職 20 題、約 8 %、分類 労働政策・法規 16 題、約 6 %、分類 労働衛生思想、分類 団体、分類 その他がそれぞれ 13 題、約 5.1 % となった。以上の分析資料を今後の研究会の進め方に役立てたい。

2. アグリコラ 470 年後の検証

山口 裕 (産業生態研究所)

ラマッチニを遡る 150 年前、医師兼鉱山学者アグリコラ (1494 ~ 1555) の活動したポヘミアのヤヒモフ鉱山を訪ね、デ・レ・メタリカ記載の坑内酸欠 (朦気) について、470 年後の検証を試みた。亀裂に富んだ坑内岩盤の岩石には、急速酸化する FeS_2 (マーカサイト) が含まれ、坑内酸欠の主要因とみられる。彼の著書には、その対策として、今に通じるプッシュプル方式換気や、酸欠空気に遭遇しても転落による骨折死や坑内湧水溺死しない本質安全対策を、イラストを交えて述べ、また、危険作業主任者の必要性を示唆する提言や、鉱山経営者たるものの労働者と安全と健康保持に関する倫理についての先覚的理念を示している。その第 1 巻には、この地に

*2004 年 4 月 16 日 (金) 16 : 20 名古屋国際会議場 211 会議室
世話人: 藤田雄三, 市橋 透, 加藤 元

*2004 年 4 月 15 日 (木)

場所: 名古屋国際会議場 222 会議室

世話人: 堀口俊一 (大阪産業保健推進センター)

おける5年間の活動期間にまとめた, すぐれた彼の哲理がまとめられている.

第43回アレルギー・免疫毒性研究会*

<講演統一テーマ>

臨床予防医学としてのアレルギー研究

<特別講演>

アスピリン喘息

榊原博樹

(藤田保健衛生大学医学部呼吸器内科・アレルギー科教授)

座長: 五藤雅博

(労働衛生コンサルタント・旭労災病院嘱託医)

ラテックスアレルギー

松永佳世子 (藤田保健衛生大学医学部皮膚科教授)

座長: 吉田 勉 (名城大学薬学部臨床医学研究室教授)

まず榊原は, アラキドン酸代謝経路とアスピリン喘息の関連性について基礎的な研究内容を説明し, 臨床的特徴やアスピリン喘息の誘発物質, アスピリン喘息を起こさない鎮痛解熱剤を紹介した. 最後にアスピリン喘息の最近の知見についても概説した. 次に松永は, ラテックスアレルギーを発症させる天然ゴム製品の紹介から始まり 欧米や日本での発生状況及び職種について説明した. またラテックスフルーツ症候群やハイリスクグループの紹介, 臨床症状や検査と診断について報告し, 多彩な症例呈示も行われた. 最後に労働衛生的注意点についても概説した. 活発な質疑応答がなされ, 盛会のうちに終了した.

*平成16年4月14日(水)18:00~20:00, 名古屋国際会議場 A会場(231会議室)

世話人代表: 森本兼囊 (大阪大学大学院医学研究科)

第43回世話人: 谷脇弘茂 (藤田保健衛生大学)